

# 「示唆」という社会的影響における 受け手の内的プロセスについて

植野 詠土

(山口大学大学院 人間社会科学研究科)

## 問題と目的

社会的影響の中には「示唆 suggestion」というものが存在する。示唆とは、与え手が受け手のことを変えてやろうという意図は存在せず、何気なく仄めかされた言動によって、受け手がそれを受容するかしらないか判断して行動するという一連のプロセスのことを指す(鈴木, 1976)。そこで本研究では、影響の与え手に対する印象(ポジティブとネガティブな感情)が示唆の受容・拒否に関わると仮説を立て、質問紙とインタビュー調査を用いて、「示唆」による受け手の内的プロセスを明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 第一研究：質問紙調査による研究

**実験参加者** 大学生 110 名 (女性 27 名, 男性 83 名)  
**質問紙** 評価あり調査用紙(与え手に対しての評価をする)と評価なし調査用紙(与え手に対し評価をしない)の 2 種類を用意する。内容は、消防庁(2007)を参考に、地震が起きた時の行動について質問を 10 問作成した。また、その 10 問の回答には、質問文の最後に、ある人物 A(与え手)が選んだ選択肢が記載されている。評価あり調査用紙は、①属性(年齢, 性別, 学部), ②A の回答からの印象(2 問, 選択, 記述), ③地震が起きたときの行動について(4 択, 8 問), ④与え手の影響を受けたのか(4 択, 理由と印象について記述)の回答を求めた。評価なし調査用紙は、②の箇所以外の回答を求めた。

### 第二研究：インタビューによる調査

**調査協力者** 大学生 1 名 (男性, 評価あり群)  
**調査の概要** 第一研究の実験参加者の中から、同意があった者にのみ依頼した。第一研究を基に A に対する印象や、どのような考えで第一研究を行ったのか等を尋ねるための半構造化面接を行った。

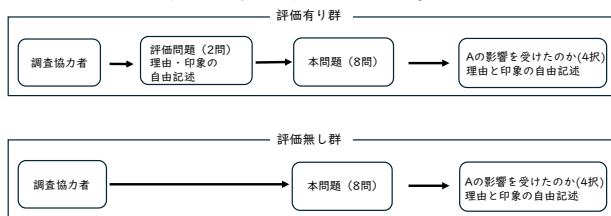


Figure1 第一研究の実験計画の手順

## 結果

**第一研究** 各質問が A の回答と一致しているのか、そこから算出した一致点数(参加者の本問題の回答が A の回答と一致しているなら+1, 一致していないなら+0 としその合計を出した。)との関係, A の回答の参考度についてそれぞれ①評価あり・なし群と受け手の受容と拒否の関係, ②A に対する印象(ポジティブとネガティブ)と受け手の受容と拒否の関係について  $\chi^2$  検定を行った。①は有意な差はみられなかったが, ②は A の回答と一致しているのかについて、「車の運転の最中に地震が起こった時」にのみ有意な差が見られた ( $\chi^2(86) = 4.91, p = .027$ )。

**第二研究** A に対する印象について、調査用紙の質問について、示唆の受容についてそれぞれ回答が得られた。A に対して印象が変わったこと、受容には実験参加者の知識や A に対する印象が関わっていることがインタビューを通して得られた。

## 考察

今回の質問の場面設定として、非日常場面であり誰もが知っているという点から地震を取り上げた。しかし、知識がある状態では示唆の受容が起こりにくく、今回の様にほとんどの質問項目で示唆が起こらない結果になった。また、知識がある状態だと A に対する評価にも影響し、実験参加者に知識があることで、本問題を回答している間も常に自分の知識と A の回答を比べて評価が行われていると考えられる。それにより示唆の受容も起こりにくく、評価あり・なしと分けても差が見られない結果となった。少なくとも、この示唆が起こる状況は受け手にとって未知であることが必要である。

## 参考文献

- 今井芳昭(2011). 社会心理学における対人的影響研究の動向と今後の課題 哲学. 125, 33-74.  
鈴木康平(1960). 示唆の受容・拒否についての実験的研究(1) 心理学研究 31(4), 209-221.  
鈴木康平(1976). 社会的影響過程について 心理学評論. 19(3), 151-171.